全教しいぶり
15年11月号発行
全胆振教職員組合

学習会で、道徳について考えました。

11 月 14 日(土)、苫小牧市で私たちの組合主催の学習会を行いました。小学校で 2018 年度(中学校では 2019 年度)からの教科化が目指されている『道徳』についてです。これまでは、どちらかと言えば忌避されてきた『道徳』ですが、その大切さは誰も否定することはできません。ただ、国の求めるように、一律の教科書でいいのか、評価できるのか、その内容としてふさわしいものは何か、など考えなければならないことはたくさんあります。学習会での講師お二人のお話を中心にまとめてみました。

『教室と世界はつながっている』 谷光氏(名寄市立大学非常勤講師)

問題提起１　大学生と学んで

「体罰も教育だ(体罰も時には必要だ)」「むかついた相手に仕返しをするのは当然」という質問に、大学生でも 5 ～ 6 割が YES と答える。大学生の中に攻撃的なまなざしを感じることもある。知らないうちに、新自由主義的な雰囲気に使っているのだろう。生きにくさ、人間疎外の感覚が教育・子育ての世界にまで広がってきている。

> 今日、日本の学校では上からの管理・統制が進行し、教育実践の自由が奪われ、多忙化が進行していく中で、多くの教師が一人ひとりの子どもの抱える生きづらさや苦悩に気づき、応答できないばかりか、逆に子ども達から発せられる「心の叫び」を抑圧していかざるを得ない状況に追い込まれている。
>
> 子どもたちが自己や他者や世界に対する「基本的信頼」を持てない状況にある。そのわけは、新自由主義が生活の深部までを競争化―市場化し、人々の社会的連帯はもちろん、個人間のつながりをずたずたにし、「自己選択・自己責任」の名のもとで「自律的個人」として生きることを強いているからである。
>
> そのような困難な学校現場の状況の中で、どのようにして子どもたちとの相互応答的な関係を回復し、そこを基盤として、子どもたちとともに「発達の糧」となる生活世界、お互いの存在を肯定・承認し、「生きることへの希望」を育んでいける生活世界を取り戻していけるだろうか。　2015　全生研基調から

上からの管理・統制が進行し、教育実践の自由が奪われ、多忙化が進行していく中で、指導する側とされる側の感覚のずれが進んでいないだろうか？

> 教師自身が学校現場で窒息させられそうな思いを抱えて生きている現実と向かい合うことと不可分に結びついている。教師が自分の生きにくさに声を上げることは、子どもの人間回復を担う教師としての視点の回復のためにも不可欠のプロセスである。　全生研基調より

「以前の私は、病気しか診ていなかったんだと思います。今は違う。病気ではなく目の前の人間を診ている実感が持てることに、医師としての喜びを感じます。」(堤未果)

「病気→問題行動」「医師→教師」に置き換えて考えてみたい。

私は次のようなことを考えながら、大学生と学んでいる。○今までの知識、「常識」だと思っていたことを疑ってみること、○意見を交流する中で、自分の立ち位置を意識し、より深く考えてみること。新自由主義の政策は、「怠け者は許されない」「効率的な人間になれ」という強烈な道徳的規範を突きつけている。(中西新太郎)　「体罰も時には必要」、本当にそうなのだろうか？と批判的に考える授業を作っていきたい。

最後に、「日本の子どもたちは見られているけれど、聞き取られていない」(国連子どもの権利委員ドックさん)。「子ども・青年の傷付きの場としての学校」(佐貫浩)から、「子

どもが子どもとして生きられる学校」をみなさんで作っていこう。そのために二つのことを訴えたい。

① 「学ぶと言うことは楽しいことだ」という学習を、「自分からの排除」を克服する学力と学びを子どもたちとともに作ること

② 「学ぶことが楽しいのは学ぶ仲間がいるからだ」ということを、授業や様々な活動を通して作り出す学級づくりをすすめること

問題提起２　道徳の「特別の教科」化にどう向き合うか

指導要領では、「道徳を要に」するとされている。いったん教科にしておけば、教科書検定などを通じてどのようにでもコントールできる体制となる。また、他教科でできるだけ道徳を扱い、他教科では扱えない道徳項目を「道徳科」で扱えということになる。(藤井啓之)　心を自由にコントールできるという危険性もある。

> 経団連　2014.4　「次代を担う人材育成に向けて求められる教育改革」
> グローバル化教育と日本人のアィデンティティの育成、道徳教育の強化を提言
> エリート―グローバリズムのマネージャー
> 大量の非エリート―ナショナリズムによる愚民化政策とゼロ・トレランスの対象
> 落ちこぼれさせられた青年に安易に愛国心といったプライドを

○学校は「勉強できる子、よい子」を育てる場になっていないか？ そこから、子どもの呼びかけ(行為)と教師の応答(指導)のズレが作られているのではないか？

○小１から、学校生活はかつてない速さで進められている。それが「小１プロブレム」「中１ギャップ」「高１クライシス」などの、ついてこられない子どもの問題が生まれ、奨学生の「暴力」行為の増加、不登校、高校中退が増えてきているのではないか？

○朝からドリル、読書、業間体育、長い拘束時間にどっさり宿題と、タイトな日課の中で、仲間との交わり、仲間とドキドキ・ワクワクする活動と感動が失われていないか？

○「学校生活チェックシート」「○○小スタンダード」などゼロ・トレランス(不寛容)な指導のもとで、教師は決まりを守らせることが自明のことになっていないか？

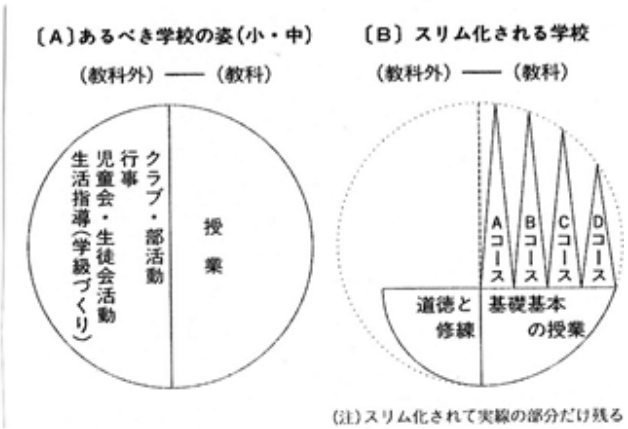
○教科教育の技術主義、道徳主義で、知らず知らずのうちに一定の価値観が注入されていないか？ 使っている教科書には歴史が正しく書かれているのか？

○学級会、生徒会の形骸化と相まって、行事など活動のプログラム化が進んでいないか？

○学校のスリム化　学校は基礎基本、道徳と鍛錬の場に、あとは塾などの教育産業に依拠することに何の疑問も持たなくなっていないか？

○「抵抗」抜きの「適応」のキャリア教育になっていないか？

坂本光男さんは、「学校のスリム化というのは学校が学校らしくなくなることだ」と指摘している。(右図)改めて、学校に今何がかけてはいけないのかを考えなくてはならない。



現職時代、大和久さんの実践に学びながら取り組んできたことを元に、考えてほしいことを提起して終わりとしたい。

①普段から、道徳教育実践を含む引き出しをたくさん用意してほしい。

②今、子どもにとって学校はどんな世界になっているのかを丁寧に検討してほしい。

③学級の分析、集団づくりと教科学習の成果と課題、当面の方針を、１人１人の子どもの顔を思い浮かべながら、ノートに書き出してみてほしい。

④指導要領道徳解説編をまずは読んでほしい。至極もっともなこともあり、クレームがついた時には反論にも使えるはず。

⑤学級の年間指導計画一覧表を作ってほしい。
　こう考えると、道徳の時間は「学級づくり」を進める大切な学びの時間となるはず。「学ぶとは真実を胸に刻むこと、教えるとは共に未来を語ること」（ルイ・アラゴン）子どもと共に学ぶ。そんな「道徳」の授業をどうぞ作りあげて下さい。

『道徳教育は道徳的？』 柳憲一氏（北海道教育大札幌校非常勤講師）

　小学校の有名な道徳資料として『手品師』があります。（ネットで検索すると、簡単に見つかります）売れない手品師が町を歩いていると、１人の男の子が…。お父さんが死んだ後、お母さんが働きに出て、ずっと帰ってこないと言う。手品師が手品を見せ、『明日もくる』と約束する。ところが、その夜「明日、代役で大劇場に出られる」と電話がかかってきた。手品師は悩んだ末に、「明日は行けない」と答えた。翌日、町の片隅でたった１人の客を相手に手品を演じていた。…というあらすじです。
　このテーマは「誠実」や「思いやり」だとされています。作者の江橋さんは

> 　だいたい先生方は友人から電話がかかってきたところを中心発問として設定するんですね。そうすると、子どもっていうのは、誰かに頼んで手紙を持ってってもらって、今日は来れないけどまた時間ができたら来るよとか、約束を破ったから後で大劇場に招待して見せてあげるとか、いろんな方法があったはずだと考えるんです。大人の批評家もそういうこと言うんですよ。そんな、いろんな方法に気がつかない手品師なんておかしいんじゃないかっていうご批判もあるんです。私はね、それは違う、大いに違うと思うんです。
> 　要するに、もちろん手品師もいろいろ考えたんですよ、考えたんだけど、**どの考えもすべて自分にとって都合のいいようにしか、そこをもとにしか考えられない**、そういう自分を、すごく腹立たしく思うわけですよね。それで、やっぱり少年との約束通りにしようと。だから、約束だから後でいいというわけじゃないんですよね。その日、子どもは楽しみにして待ってるわけだから、**後で埋め合わせがつくなんていうことは自分の勝手ですよね。**それが許せなかった。

と言っています。ネット上での現場からの質問でも、次のようなものがあります。

> ○「誠実」のねらいからずれてしまうことが多いのですが、どうしたらよいでしょうか？
> ○資料が非現実的で、子どもの実態に合わないのでは？／解決策を見つける方が、「生きる力」の育成につながりませんか？
> ○「夢をあきらめていいのですか？」という反応にどう切り返せばいいのですか？／「不幸な子どもとの約束でなかったら、きっと大劇場を選んだはず」という反応にどう切り返せばいいですか？

（旧）文部省の『小学校道徳の指導資料とその活用法①』には次のように書かれています。

> 　「人間らしく、豊かな生活のあり方を、物質の充足という面からのみ考える傾向の強い現代の児童たちに、相手が幼児であっても、人格を尊重し、自己の言動に責任を持ち、誠実に行動した手品師の行為は、美しく、さわやかな、そして心温まる感動を呼ぶものであろう。」
> 　「しかし、一方檜舞台に出演する機会は逃すべきでない。一方、子どもとの約束も人間として果たすべきである。これを両立させる方法をいかにするか考えるという、合理的、現実的な対処を取る考えも、児童たちの話し合いの中に出ることが予想される。このような「生きる」ということに関わる現実的対処も重要である。しかし、ここでは、狙いとの関連に即して、この手品師の優しさ、誠実みある人間性と、その行動に焦点をあて、日頃の自分たちの行動を見つめる方向を主とした扱いとするのがよいであろう。」

　さて、みなさんはどう考えますか？　私には、「反利己主義としての思いやり」ばかり勧めている、そんな嘘くささやうさんくささを感じさせます。『手品師』の模範的授業では、疑問や異論を優しく手なずけたり、体よくあしらったりするものが多い気がするのです。

　私は、今年大学生に「道徳の指導法ノート」を書いてもらっています。その中には、次のような回答がありました。

１【「反利己主義・利他主義」の誠実&思いやり観について、あなたはどう考えますか】

○自己犠牲が誠実であり、他人のために自分を捨てるというのは思いやりなんかでは無い。ただの投げやりである。自分だけ良ければよいという考えでは、いつか身を滅ぼすだろうし、他人のためだけでも同様である。１番大切なのは自分のことのように相手のことを思うことである。…

○人間誰もがそういうものを持ってたらいいし、自分もそういう人になりたいとは思うけど、それを道徳で教えるとなると、プリントに載っている意見のように、自由な考えをさせないで、正解を求める授業になってしまうと思った。

２【「自らの成長を土台に他者と関わる」誠実&思いやり観について、あれば、あなた自身の経験もあわせて、考えを記して下さい】

○…中学・高校と学級代表をやってきて…「リーダーとして責任をもって前に出ねば」という意識が強く、それが誠実さや思いやりだと思っていた。しかし、実際はそうではなく、他人の中に溶け込んで同じ立場で考えるかが大切で、そうすればより誠実さや思いやりの心を、より深く伝えられるのではないかと思うようになった。

○私はインターネットを通じて…(動画編集技術を)…独学ではあるが学び始めた。そして現在、僕が作ったものは友だちに「すごい」と言われることが度々あって嬉しく感じる。「誰かのために自分を磨く」というよりは、「自分がしたいから頑張った」方が、周りに良い影響を与えられると思った。

○高校のハンドボール部で、私はキーパーとして上手くなるために、シュートをたくさん打ってもらった。逆にシューターはシュートの精度を上げるために、私にキーパーに入るように頼んでくることがよくあった。お互いがお互いのモチベーションになるし、シューターが頑張って練習をしていたことを知っているから、大会でシュートが入りやすいようにパスや声かけなどを配慮したという思いやりが生まれた。

３【「道徳教育は道徳的？」の授業について、あなたの感想や意見を記して下さい】

○私も、道徳の授業では「先生の求める」答えを当てに行っていた１人でした。ついでに言うと、そういう風な人間にならなくちゃ、認められたいと、優しくいようと努めたり、我慢が多かったり、そんな自分に自己満足しているような児童でした。でも今は、我慢できなくて、言いたいことを言ってしまって、困っています。反動でしょうか。本当に身についていないということになります。

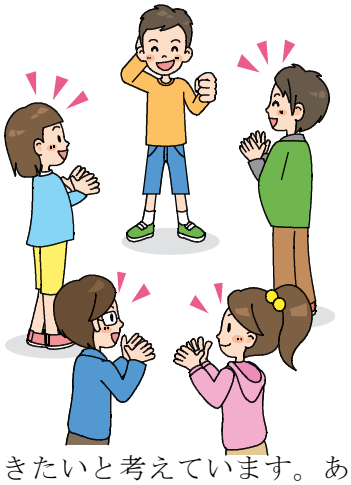
○道徳が生きる力・考える力につながるとするのであれば、指導案(東京書籍版)のような、建前の道徳では道徳的であると言えないと思う。

○…何が正しいのか、どうすべきなのか追い求めていくことが「道徳的」なのだと感じた。

○道徳教育を本当に必要だと感じるのは、授業内容によるのかなと思った。ただ教師が誘導するだけでは学ぶこともできず、生徒自身の意見が授業を作っていくと思った。…

○道徳が改めて答えのない授業だと考えさせられた。たくさんの人がいて、たくさんの考えがあって、一方の考えから見れば自己中心的でも、他の考え方から見れば自己実現でもある。何が正しいのかわからないのは、すごく難しいなと思った。

私自身は、①異論を話せる(少数派も話せる)空間を、②持論を述べる楽しさ、大切にされる仲間作り、③出会い直し、関係のし直し(他論の発見)ができる、これらを学校だけでなく、地域・社会に広げていけたらと、思っています。



道徳教科審でさえこう言っています。「多様で効果的な道徳教育の指導方法」で「多角的に考え、判断するという認知的な能力、道徳的価値の大切さを感じ」る道徳を。道徳授業の内容には、自由度があるのです。それを生かし、国が一方的な求める道徳に風穴を開けることは可能です。あなた１人だけではなく、周りの方たちと共同で「子どものための道徳」を作り、広げていってほしいと思います。

※この内容については、谷先生、柳先生の校正は経ていません。お二人のお話をできるだけわかりやすく伝えようとしたもので、私見が入ったおそれが多分にあることをお断りしておきます。

全教いぶりでは、これからも継続的に道徳教育を考えていきたいと考えています。あなたも参加してみませんか。(ご連絡先：☎ 0144-87-6222 白鳥)